和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、
（め）　四段・用　過去「けり」体　（うたあはせ）　ラ変・用　過去「けり」体

和泉式部が保昌の妻として丹後に下った時に、都で歌合せがあったのだが、

小式部内侍、歌よみにとられてよみけるを、定頼の中納言、
四段・未　受身「る」用　四段・用　過去「けり」体

小式部内侍が（その歌合せの）詠み手に選ばれて歌を詠んだところ、定頼の中納言が

たはぶれに小式部の内侍に、

ふざけて小式部内侍に、

「丹後へつかはしける人は参りにたるや。」
四段・用　過去「けり」体　ⓚ中納言→小式部　四段・用　完了「ぬ」用　係助（疑問）　完了「たり」体

「丹後へ遣いにやった人は帰ってきましたか。」

と言ひ入れて、局の前を過ぎられけるを、小式部の内侍、
下二・用　上二・未　尊敬「らる」用　過去「けり」体

と（局の中に向かって）言って、局の前を通り過ぎなさったところ、小式部内侍は、

御簾（みす）よりなかば（なほし）出で（下二・用）て、直衣（下二・用）の袖をひかへて、

御簾から体を半分乗り出して、（中納言の）直衣の袖をつかんで、

大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天橋立
形・ク活用・已　四段・用　打消「ず」用　上一・未

大江山から生野への道は遠いので私は天橋立に行ったこともないし、手紙も見ていません。

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに。かかるやうはある。」
下二・用　過去「けり」終　形動・ナリ活用・用　形・シク活用・用　係助（反語）　ラ変・体

※この部分は教科書によって無い場合もあります。

と詠みかけた。思いがけず驚いて「これはどうしたことだ。このようなことがあるか。」

とばかり言ひて、返しにも及ばず、袖をひきはなちて逃げられにけり。
四段・用　四段・未　四段・用　下二・未　完了「ぬ」用　打消「ず」用　尊敬「らる」用　過去「けり」終

とだけ言って、歌を詠み返すこともできず、袖を引っ張ってお逃げになってしまった。

小式部、これより歌詠みの世おぼえ出で来にけり。
カ変・用　完了「ぬ」用　過去「けり」終

小式部内侍はこの時から歌詠みの世界で評判が高くなっていったのだった。

にて…として
ほど…時（時間の程度）
とる…選び定める
たはぶれに…冗談で
つかはす…行かせる　おやりになる
参る…参上する（『行く』の謙譲語）
言ひ入る…中に向かって言う
派遣
なかば…半分
ひかふ…引き止める・引っ張る
思はず…思いがけず
あさまし…驚く・あきれる
返し…返歌
ひきはなつ…振りきって
世おぼえ…世間の評判

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/